

小犬座の変光星

たなか踏基

久しく星を観るのを忘れていた。叙情を歌う Singer Song Writer のビデオを観た。映像の彼女は、軽妙なお喋りとギター弾語りの傍ら、宙(そら)に焦がれた長兄への思慕の念を交え宇宙と星を語っていた。その歌と語り口調が、少年時代の星の記憶を甦らせた。

私は、信州松本で多感な少年時代を過ごした。斜め前に外科の教授の家があり、その教授が私の胃切除の執刀医だった。私は高校休学を余儀なくされ、小説を書いて暮らした。文系志望の私が、創作活動を諦め後に理系に転進したのは、明治女の母の叱責と、父失職による家の困窮に加えて自身の才能の無さを自覚したからである。

松本市の西北部、小高い丘上の城山に国立結核療養所があった。現在その療養所は既に無いと聞いている。結核療養中の年長の女性K嬢を、母に内緒で私が見舞ったのは、外科病棟に実習に来た看護学生との縁が始まりである。美しい三人姉妹だった。彼女の医療への動機も、長姉の結核発病にあったのかもしれない。始め末妹と親しくなったが、療養所にK嬢を見舞ってからはその長姉に強く惹かれた。私の初恋と言っても良い。妹が私より三つ年上であったから、姉は七歳位年長だったのではあるまいか? こうして療養所への散歩は、休学の無聊を慰める密かな楽しみとなった。

したのであろう「星の歳時記」と記す冊子を、ベッドの枕頭台から取出した時の、少女の如きK嬢のはにかんだ微笑を今も忘れることができない。

始めに覚えた星座は、牡牛座のプレアデス星団(M45)、中国28宿の一つ昴宿(すばる)6連星である。ペテルギウス・リゲルのオリオン座、カストル・ポルクスの双子座、牡牛座の眼赤く光るアルデバランの星々であった。次は全天宙最も輝く大犬座のシリウス(天狼)では無く、小犬座プロキオンでも無く、アラビア語で「泣き濡れた瞳」意の、小犬座変光星のゴメイロキオンを結ぶ「冬の大三角」にも増して、この小さな変光星 が特に印象深い。

私が始めてK嬢に出逢った時、この人が病棟実習の、あの高校同窓の看護学生の姉だとはとても信じられなかった。その妹の方はやや色黒で、舌足らずに話す一重瞼の女性だったし、対象的なK嬢は、髪の毛をおかっぱにして、色白でまるで黒い大きな瞳の日本人形のような女性だった。可哀想で私は思わず泣きたくなった。肌の白さは、結核患者にありがちだったが、孤独な少年の私を魅了した。「もう余り来ないでネ」感染を心配したK嬢の忠告を度々無視した。

休学の慰めに、クラリネットを吹くことを覚えた秋晴れの日のことである。私は練習のために、療養所から反対の峪越えの丘に立ってクラリネットを吹いた。「この前笛の音を聞いたね。知らない内に泣いたのよ。」次にK嬢と逢ったとき、そう言いながらじっ

と私を見詰めた。それ以来、K嬢の瞳のイメージが、小犬座のゴメイザと何故か重なっている。滑らっこい手首の丸みから指先までの白さもさることながら、とりわけ私が好きだったのは、K嬢が興奮に駆られた時にみせる、上気した頬に浮かべる透いて出るような血の赤味だった。何時も頭の毛をおかっぱにしている、時に知能の遅れた少女のようににはしゃぎ、ふとした動作にもぎこちない様子をみせたK嬢が、この血の赤味を見せるとき、どんなに私はK嬢をいとおしく想ったことか。そんな時、言うに言われぬ悲哀のような感情でK嬢を愛した。

少年の日の片思いの淡い恋だった。本当を言えばK嬢は、末妹同窓の一少年の私を屈せせないために、時に面談室で、時にベッドの傍らで「星の歳時記」を説明してくれただけかもしれない。だから普段のK嬢は、少女の愛らしさとは別の静かに微笑む年長の女性だった。表面にキラキラする女の性も決して見せなかった。穏やかな微笑は、透明な顔に一寸引かれた唇の朱の色に調和して、心の中に暫し瞬く星ゴメイザの如く浮かんで消えた。

松本を離れてK嬢と、暫く手紙のやりとりがあつたが何時しか途絶えた。全天で88星座があるという。共に星空を見上げた訳ではなく、単に「星の歳時記」の説明を受けたにすぎないK嬢と、あの時一緒に星を探せたらどんなにか良かっただろうに。ビデオの叙情歌を聞いて今切々と想う。

了